

まちなか水路



治水と利水の歴史

長井市には「まちなか水路」と呼ばれる、市街地を流れる多くの小川や水路がある。古くから農業用水や生活用水として利用され、人々の生活の基盤になるとともに、水害から生活を守る役割も果たしてきた。

まちなか水路を流れる水は置賜野川から取水され、市街地の西側の農村で利用された後、町場の縦横に走る河川や水路に流れ出る。このまちなか水路は江戸時代後期の絵図にも描かれている。当時、暴れ川と呼ばれた置賜野川は度々洪水を起こしていたが、人々は石積みのかき止め防を築いて洪水を防いだり、置賜野川に堰を設けて水を取り入れ、農村や町場に張り巡らされた多くの水路に流れを分散させることで、水害から生活を守っていた。その後、昭和時代の企業誘致による水需要の増加や土地改良事業の実施、道路整備による水路の暗渠化などにより、水路の改修が行われ、現在のまちなか水路の形となった。現在は主に消流雪用水や防火用水として水路の水が利用されており、今なお人々の生活に深く根差している。

守り、育む水の道

まちなか水路が古くから人々の生活に密接に関わってきた歴史から、まちなか水路を守り、伝えようとする活動が行われている。地域住民による水路の清掃活動や、水路を巡るまち歩きイベントを行い、地域住民だけでなく、地域外の人々にも水路に親しみを持ってもらえるような取り組みを行っている。



まちなか水路清掃の様子 提供:長井市

暮らしを支えたまちなか水路

まちなか水路は家並みに沿って流れており、かつてそれぞれの家に水を供給していた。屋敷に水を引き入れる「入り水」や、水を引き入れた後、洗い場として利用された「入れかわど」など、先人たちの工夫が今でも随所に見ることが出来る。こうした痕跡が歴史的・文化的に評価され、市街地の一部が「最上川上流域における長井の町場景観」として、国の重要な文化的景観に選定された。

まちなか水路と梅花藻

まちなか水路には清流にしか見られないとされる梅花藻が自生しており、初夏から秋にかけて白い花を咲かせる。長井市では梅花藻のスポットをまとめた「梅花藻マップ」を作成している。マップ片手に街を歩いてみてはいかがだろうか。



梅花藻の花



長井市街地全景写真 提供:長井市



入れかわど(旧丸大扇屋)

